

開催地名：東京都大島町	
開催日時	令和元年 11 月 21 日（木） 19：30 ～ 21：00
開催場所	大島町開発総合センター
語り部	小松 三生（岩手県陸前高田市）
参加者	各地区自主防災組織、関係機関 約 150 名
開催経緯	班長の高齢化（若手の後継者問題）、地域コミュニティの稀薄化（班員の顔がわからない）が問題となっている中、今後の防災活動のヒントになるようなお話を伺うとともに、災害発生時の避難所の運営についてのお話も伺い、地域住民主導の運営に向けたヒントとしたい。
内容	（１） 東日本大震災の被害状況 震源の深さが 25 キロメートル前後の地震は、津波発生の可能性が高いと言われている、東日本大震災の震源は、深さ 24 キロメートルであったため、陸前高田市では、死者・行方不明者が 1,761 名、被災世帯 4,065 世帯という甚大な被害を受けた。津波は第一波、第二波と続けて街を襲い、第二波で 5.5 メートルの防潮堤を越えて市街地を壊滅させた。震災前の人口は 24,000 名を超えていたが、現在は 19,000 名を切っている状況である。（震災直前の世帯数は 8,086 世帯、現在の世帯数は 7,603 世帯） 遡上高 17.6 メートルの津波により、市内中心部は市役所、消防署、病院、銀行、学校をはじめ、その他公共施設等の都市インフラのほとんどがなくなった。市民が困ったのは、商店街が津波に流されてしまい、食料を入手できなかったことである。避難所にいる人には食料が支給されたが、自宅が無事で、自宅にいる人たちには支給されなかった。これは、地域防災計画に記載されていなかったためであり、今後の課題と言える。 被災地は陸前高田市だけではなく、自衛隊員、警視庁や皇宮警察をはじめとする各地の警察、消防庁をはじめとする各地の消防隊等、全国の多くの方々に援助していただき、本当に感謝している。 （２） 避難所運営 地震を受けて、すぐに小泉地区会館という集会所に避難所を開設した。（避難所開設前には、必ず避難所としての利用に適切かどうか、柱や外壁、屋根についての安全確認をする必要がある）小泉地区会館は市指定の避難所ではなく、小泉地区自主防災会運営の避難所である。こちらに、97 名の住民が身を寄せた。トイレは男女 1 つずつしか設置されていないため、数が足りず不便であった。当然停電していたが、自主防災会で購入していた発電機があったので活用した。避難した近隣住民のほとんどが高齢者で、通院している方々が多かったため、病院への通院手段を確

保する必要があった。そのため、複数の車両から燃料を抜いてかき集め、病院移送用の車両を1台確保した。また、避難が必要な災害が発生すると、必ず盗難が発生するので、警備体制の準備・構築が必要である。

行政サイドは避難者をまとめておきたいという意向がある。その方が管理する側としては管理しやすいというメリットが確かにあるが、避難所の規模が大きくなればなるほど、食料確保は難しくなる。また、規模の大きさに比例して、様々なトラブルも増えてしまう。実際に災害を経験して、痛感した。

皆さんもご想像されたとおり、一般的に男性より女性の方が避難所内の細かい部分に目が届く。女性視点での取り組みは非常に有効だと思う。しかしながら、食事の準備から要介護者の対応、掃除や洗濯等、避難所内の仕事はどうしても女性に集中してしまうことにより、感情的なトラブルや不満も出てきたことは否めない。そのあたりの配慮は必要で、極力役割を分担して対応していくことが大切だと思う。

(3) さいごに

災害から身を守るためには、自助、共助、公助が必要となる。特に、0 避難時にどのような行動をとるかで結果が変わってくる。自助として「津波でんでんこ」という言葉があるが、自分自身で自分を助ける、これが避難の基本である。自分で助けられない場合は「要援護者」となり、近くにいる人に助けてもらうことになる。これが共助である。消防や警察等は有事の際にどうしても活動が限定されてしまうので、公助については平時の訓練や教育によるものと認識しておくべきである。従って、自助の実行、共助の地域住民の助け合いの実行が不可欠である。



開催地より

避難所運営についてのお話は、とても参考になった。自主防災組織の在り方についても勉強になった。今後の防災活動に役立てていけると思う。